

Title	「方五妹と彼女の『あたしの亭主』」：楊絳の散文翻訳
Sub Title	"Fang Wumei and her 'Old man'" : a translation of an essay by Yang Jiang
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2026
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.41 (2026.) ,p.161 (32)- 192 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20260630-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フアンウーメイ⁽¹⁾
「方五妹と彼女の『あたしの亭主』」⁽²⁾

ヤンジャン
—— 楊絳の散文翻訳 ——

櫻庭 ゆみ子

はじめに

作家の楊絳（一九一―二〇一六）は、かつて『柯霊選集⁽³⁾』の序文に寄せて「（柯霊の）小説はまるで散文のようだと『言われる』と評している。対象との距離感が絶妙であり、感情表現は心の襞^{ひだ}に分け入るように繊細で、まるで現場を再現したかのように生き生きと真実味あふれる語りがなされている⁽⁵⁾というのだが、この評価は実は楊絳自身の散文にそのまま当てはまる。今回の主人公「方五妹」は、農村から出稼ぎで都市にやってきた家事手伝いの女性である。本作品は、頑固で意地っぱりで、時々露呈する見識のせまさ、思い込みの強さで周囲を困らせながら、愚直とも言える誠実さから人々に重宝される方五妹との日常生活でのやり取りを描いたものであり、散文のような小説ならぬ、小説のような散文である。楊絳の散文／回想録には、このように家族、友人の他に日常生活でかわりをもった市井の

人々が多く登場する。本作はそういった作品のうち「林奶奶」^⑥「順姐の『自由恋愛』」^⑦、そして前回紹介した「彼女の語り」^⑧に続く、傑作な家政婦ものの一つである。「方五妹」の南北の方言が混ざった独特の言葉遣いの描写もさることながら、常識とは少しずれた行動と予想される対応とのギャップから醸し出される滑稽味、細かな具体の些事を尽きるこたない好奇心で見つめる視線の存在、そして一種あきらめともとれるかすかな哀愁等々、楊絳のテキストを魅力あるものにする特質は、やや趣を異にする「彼女の語り」を除く「家政婦もの」に一貫して感じられる。怠け者で自己中心そのものの「亭主」を盲目的にかばう方五妹に対し、その突飛とも言える行動に振り回される一家の様子を、絶妙な会話のやり取りで描く軽妙なユーモアも健在である。

これが実は作家の一人娘のかなり急な死の後ほどなくして書き始められたものだという背景を知らなければ、散文の名手による円熟した作品として紹介するだけで事足りるのかもしれない。ところが、「娘を想って」^⑨描いた^⑩というこの作品は、当時、楊絳が夫錢鍾書の看病に追われる中、一人娘の錢瑗が癌を宣告されてから僅か一年あまりで亡くなった、しかも楊絳に病名と状況を知らされたのがその死の四か月前だったといういわば突然の喪失の衝撃の中で書かれている。

これを知った時、娘の死を微塵も感じさせない、ユーモアすら漂わせたこの作品を前にして戸惑ったことを覚えている。深く愛していた一人娘を突然亡くするという事態の前に、喪失の傷がぱっくりと口を開けている状態^⑪で、記憶のイメージを再現しようと紙面に向かうことは可能なのか。書くという行為の意味は楊絳にとって一体どういうことなのか、そこで書かれる言葉は楊絳という一人の作家にどのような作用を起こすのか、それは言葉の有効な力といっていいものなのか。いったい物を書く行為と言葉の関係とはどういうものなのか等、書く行為と言葉をめぐる様々な関

係について多くの疑問が生ずることになった。一体全体、たった一人の愛娘を突然亡くしたというのに、なぜこのような、そこはかとないうーモアのにじむ散文を書くことが出来たのだろうか。

その答えの鍵は、この作家の場合、対象との距離感、そして変わらぬ形式、文体にあるのだろう、か。楊絳はきわめて理性的な書き手である。英国の作家フィールディングやジェーン・オースティンを論じた文章^⑩に示すように、理智を重んじ、感情に流されずに目の前の現実を観察し、硬直した制度との齟齬で生じる矛盾した人間の行動を描いて見せ、人間の本来持つしなやかさを失った不自然さを際立たせて笑いを誘うという喜劇の手法を自らの執筆で実践してきた。彼女が、欠点をも含めた人間を許容し、人間社会を肯定する西欧型古典的ヒューマニズムの精神を受け継いでいるということは、これまでも言及してきた。楊絳は、高揚を避け、沈着冷静に観察して描き出す姿勢から導き出される緻密なプロットで語りを進めていく。その際カラストロフィーは持ち込まず、すなわち悲劇ではなく喜劇の視線で人間模様を描き出す。ということはつまり、娘の死という耐え難い悲劇の際も、ともかく自分のスタイルを守って書くことで精神的に崩れ落ちる危険をなんとか避けた、すなわち悲しみは、確固たるスタイルの中にそとと紛れ込ませた、ということなのだろうか。

原稿用紙にペンで書きつける所作が呼び覚ます実感^⑪、すなわち過去の生活の中にあつた声、肌触り、を筆触につなぎとめながら時間の流れを一瞬停めて心象風景を呼び覚ます。記憶の中での愛する対象との邂逅を願ってイメージ化した、ということでもあるのだろうか。死別という衝撃は、一定の歳月を経たならばそれを言葉に昇華することは可能なのかもしれない。しかし、まだ生々しい傷が血を流している時期に対象をイメージ化する／できるというのは、「書くこと」が「生きること」に結びついた作家のみがぎりぎりできた防御のスタイルだったということか。

「文体は人格の骨格である」⁽¹⁴⁾とは今日こそ再考したい言葉であるが、楊絳はこの骨格を保ちながら、悲しみを経験した後も人間が人間であり続けるために書き続けたのか。楊絳は本作発表後の翌年、夫の錢鍾書を亡くし、それこそ必死で取り組んだ『パイドン』の英訳からの重訳作業を行った後、先に逝った娘と夫二人を偲んで『我们仨』『私たち三人』を書いていく。五年後のことである。そこでは、ユーモアの余裕などない切羽詰まった感情が通奏低音となり、ほとぼりするような悲しみがあふれていた。逆から言えば、娘の死の直後において、作家は必至で自分の悲しみを人間一般の地平に置きなおし、個人的感情を類型へと昇華させ、秩序の回復を図ったとも言えないか。正確な答えはわからない。ただ一つ言えるのは、この背景を知ってこの散文を読むと、起きた出来事とテキストの装われた平静さとのギャップゆえに悲しみの深さを一層深く感じ取りうるだろうということ。テキストの重層性を知った読み手が、襲におりこまれた情感を自らの生理感覚として受け止める、つまり、言葉を通じて「悲しみ」の本質を感じることが出来るかもしれないということである。テキストを文脈に言及しながら翻訳紹介することの意味もここにあるのかもしれない。

邦訳に際して語句レベルの説明は割注の「」で示し、その他の注は文末にまとめている。

「方五妹と彼女の『あたしの亭主』」 フアンウーメイ

方おばさんは「時給工」【時給で賃金を稼ぐ労働者】である。背が高く、動作が機敏で力もちだった。重いものでも軽々と持ち上げ、黙っててきぱきと仕事を片付ける。十数年前に初めて我が家に来た時すでに五十を過ぎていたが、四十にしか見えなかった。紹介してくれた人は「ともかく方五妹と話をしちゃだめ、始まったら一巻の終わりだから

ね」と警告してくれた。

私は方おばさんの人のよさそうな笑顔につられ、ある日うつかり話しかけてしまった。たちまち仕事もそっちのけで、私相手にとめどなく話し続けたのである。

方おばさんは江蘇省の山村に住む農民で、長年上海や北京で使用人として働いていた。大躍進の時に夫が餓死し、「文革」中に、北京の年配の男と再婚している。言葉はあちこちのなまりが混ざり、お国訛りが抜けずに「蛋^{ダン}」を「大^ダ」に、「飯碗^{ファンワン}」を「法瓦^{ファワ}」と発音するのだが、さらに自己流に変容させた北京語、例えば「絨布^{ロンブ}」「フェルト」を「濃布^{ノンブ}」に、「肉糸^{ロウスイ}」「細切り肉」を「洛死^{ルオシ}」とやるので、何を言っているのか意味不明のことがしょっちゅうだった。憤りを示す常套句は「小丫個^{シャオヤーガ}」だったが、罵り言葉なのかと聞いたところ、そうではないと言う。いずれにしろ自分でも意味がわからないのだ。そして彼女が二言目には口にするどこぞの方言とも知れぬ言葉が「あたしの亭主」だった。

「ねえ、五妹、あなたのお兄さんは革命烈士だったし、妹さんは模範労働者なのだから、あなたも村ではきつと模範労働者だったでしょ」と聞いたことがある。

「労働模範が何かい？ タオル一枚に石鹼二つつきりだろー」口ではさげすみながらも心中は憤懣やるかたなしで「あたしが用水地の泥を担いで坂を上り下りすりゃ、若造だって追いつきゃしないよ。それで「方妹を労働模範に推そう」なんて言っておきながら、何人かの小娘ども（小丫個）が裏で「我々は田植えの名手〇〇〇を推します」だとか。小娘があたしに勝てると思うかい？ だのに毎晩一軒ずつ、あたしじゃなくてあの娘を推すようにって言って回ったんだよ。小汚い小娘たちだ。タオル一枚に石鹼二つつきりだつてのにさ、こそこそと夜中に一軒ずつ回って！」

五妹によると、彼女は大きなおなかを突き出してそれはたくさんの苗を植えた。子供が生まれ落ちたのがちょうど田畑の配分時期だったので、子供は阿田と名づけられた。ところが大量の苗を植えたというのに労働点数すらもらえない。かつとなって上海に飛び出し、乳母になったのだという。

彼女を雇った主人はそろばん高い寧波人^{ニンポー}だった。五妹は乳母と賄いを兼ね、さらに洗濯と部屋の掃除も行い、夜昼^{よるひる}休む間もなく、夜中に赤ん坊に授乳したあとは更に布靴の底を縫わねばならなかった。⁽¹⁵⁾ 彼女は白米を食べるだけで濃い乳がたっぷり出たので、赤ん坊は色白で丸々と育ったが、育ったところでお払い箱にされてしまう。

五妹は一度故郷の家に戻り、一人子供を産むともう一度乳母として出稼ぎに行った。子供は村で人に預けたのだが面倒見が悪く一人が死んでしまった。それでも合わせて息子二人と娘一人を育て上げている。

上海ではたまたま解放軍上官の奥様に気に入られ、北京と一緒にいて行くことになり、そこで戸籍ももらって、前後していくつかの軍幹部の家で働くことになった。文化大革命で雇い主一家が「闘私批修⁽¹⁶⁾」【私心を排し資本主義を批判する】ということで五妹を田舎に追い返そうとしたため、仕方なく彼女は再婚したのだった。五妹はよく「もっと早くにあなたとここに来ていたら、うちの亭主に嫁がなくても済んだのに」と口にした。

彼女は私のことをもっぱら「アニヤン」と呼ぶ。なんと言っているのかわからなかったの、鍾書⁽¹⁷⁾と阿圓⁽¹⁸⁾に尋ねたところ、二人は笑いをこらえながら言った。「たぶん「阿娘^{アニシ}(母さん)」って言ってるんじゃない？」本人に尋ねてみると「銭先生もお嬢様も「阿娘」って呼んでなさるじゃないですか」と言う。こうして私は五妹の「母さん」になったのである。

五妹は、弟が三十四円で売られたことをまだ覚えていたと言った。当時彼女は九歳だったが、すでに嫁にやる約束

があつたので彼女を売るわけにはいかなかった。母親はこの三十四円で柄物の布を買い、五妹に新しい服を作り嫁ぎ先に幼女婚⁽²⁰⁾として送り出したのだという。

「しかたがないってこつたね⁽²¹⁾」とため息とともに五妹は言った。これも彼女がよく使う言葉で、単なる口癖のようにも聞こえるが、よく考えてみると、人生経験を積んだ者には、なかなか哲理に富んだ言葉だとわかるだろう。

五妹は我が家の買い物を請け負おうとはしなかった。計算ができずに弁償ばかりしてきたからだという。弁償する必要はないし、帳簿付けもしなくていいわと私は言った。そして財布にお金を入れ、使いきったら補充するようにして手間を省いた。

五妹は買い物を終えると、どうしても端金^{はしたかね}まで報告しないと気が済まなかった。私はうんうんと適当に応え、まともに聞かなかった。翌日、五妹が憤慨しながら駆けつけてきた。

「あたしは昨晩うちの亭主と一晩かかって計算したんですよ。阿娘、ひどいじゃないですか、あたしが計算ができないからって。あんたさまは計算できるのに！」

どうやら私が釣りを一銭少なく要求したらしい。言い訳がみつからなかった。うまい具合に五妹が買物に使う財布が私の手元にあつたので、逆さに振ってみると、一銭硬貨が出てきた。

「これじゃない？」私は言った。

五妹は一銭の行方がわかったので満足し、その硬貨は、もしかしたら彼女に濡れ衣を着せるために私が入れたのかもしれないなどとは全く考えなかった。こうして五妹は私が帳簿を付けないことに慣れていったが、それでも自分が計算間違いをやつたと気付くと、なりふり構わずとことん追及するのだった。ある時、帰宅して買い物かごを下ろす

なり、ひどく慌てた様子で数十銭かを間違えたと言った。私が「まあいいじゃない。野菜売りにもうけさせてやりなさいよ」と言い終わらぬうちに、鬪牛の如くものすごいスピードで飛び出していった。突き倒されずに済んだだけましで、押しとどめようもなかった。ほどなくして再び飛ぶように階段を駆け上ってきた。金を取り返したのである。私は、あなたの時間の方がそのわずかなお金よりも貴重なんじゃない、とは言いかねたのだった。

五妹は買ひ物をして支払ったあとと品物を持ち帰るのをよく忘れることがあった。追いかけても間に合わないときなどは、癩癪玉を破裂させ「あの小娘めが」と怒鳴り続け、私たちが慰めてやらねばならなかった。ある店の女性販売員たちに特に不満をもち、向こうは「鶏大^{ジューダ}」が何かわからないと言ったと言う。五妹はこう私に説明してくれた。

「あたしがね、『あたしらの鶏は、コココ、ココココガーって鳴くんだよ（とここで彼女は片手を背後に回して鶏が卵を産む仕草をした）。これをあんたがたは何て言うんかい？』て聞いたらさ、あいつらはね、歯をむき出して『鶏^ジ（なまってズと発音）大^ダ』って言うんだよ」（五妹はことさら真似をして「蛋^{ダン}」の字を「大^ダ」と声に出した）。店員たちは五妹をからかったに違いなかった。

五妹は我が家に來た当初、早めに帰宅させてくれと要求した。家には亭主がいて自分の帰りを待っていると云うのである。その亭主は退職した理髪師だった。理髪店が後^{のち}に料理店になり、亭主には昼食を提供する代わりに夜の守衛を任せた。そこで亭主の方は毎日五妹が帰宅して夕食を作るのを待ち、夕食後に夜勤に出るのだった。「今日はあたしの亭主に餃子（あるいはワンタンか薄餅【小麦粉を水で溶いて丸く薄く焼いたもの。具を巻き込んで食べる】等々）を作ってやるって言ったんだ」とよく言った。

五妹が我が家で働く時間は次第に長くなり、我々のために餃子、ワンタン、薄餅等々を、作ってくれるようにもな

った。巧みな出来だった。私のために作ってくれるワントンは特別小さく数も少なく、「銭先生」のものは大ぶり得多め、「お嬢さん」のものは更に大きく量もたっぷりである。ワントンは大少構わずに一度に鍋に入れる。煮上がると、私のはどこかに消え、「銭先生」は形を成さず、「お嬢さん」のも型崩れしてべたべたと相成る。如何にも五妹がやらかしそうなことだった。それでも彼女は「奪い合いの的」だった。どの家も彼女を欲しがり、手放そうとする家はなかった。どの家も五妹が得難き人物であることをわかつているのである。

ある日、思うところがあつて何かを聞いたがっている様子だった。彼女は言った。「阿娘、あたしの亭主は頭がおかしいと違いますかい。あの年阿田に家も作つてやり嫁も取らせてたんで、おっかさんに会いにあたしは故郷に戻つて三、四か月いたんですよ。そしたらうちの亭主がさ、騒いでね、あたしが逃げ出しちまつて、別の男に嫁いだなんと言ひ出したんですよ、あたしの娘が北京に嫁いで来てるのに、どこに行くつてんですか。あたしが戻った時、ちょうど路地であの人にいくわしたんですよ。あたしがこっち側を歩いて向こうがあつちから来るところで。あたしを見るなりぎょうてんして、見せたかったですよ、まるで化け物にいくわしたみたいに怯えてさ」

二人が一緒に家に戻った後も亭主の顔色は死人のように真つ青だった。

五妹は続けて胸の引っかかりを吐き出した。亭主が彼女のスーツケースをこじ開けたのである。そこには彼女の銀行の預金証書が入っていた。

「預金証書は返してくれたの？」

「あの人が預かつてるんです」

「預金証書の名義はあの人の名前に替えちゃったの？」

「阿娘、なんで知ってなさるんだい——あたしの亭主はね、あたしの名前でもあの人の名前でも同じだって言うんですよ」

「ならば、あなたの名前でも同じじゃないの」

五妹は慌てて釈明した。「あたしの亭主は誰よりも正直もんでね、あの人を選んだのも根がいい人だからですよ。最初は転職した解放軍兵⁽²²⁾があたしを嫁にしたがっただけどさ。金持ちで、家には炕^カ【オンドルに似た構造で暖めた寢床兼団らんスペース】に寝たきりの父親がいて、もしあたしが嫁いだら病人の世話にかかり切り、父親に仕えるだけになっちまう。あたしは仕事に出て、金を稼いであたしの子供らを養わなきゃならないですよ。あたしはね、一番貧しい人を選んで、まずちゃんとこう話を決めてね、あたしは外で働かなきゃならない、子供たちが結婚して一人前になったら、そしたら一緒に暮らすってさ。あたしの亭主はほんと根がいい人でね、あたしの言うことにみんないよって言ったんですよ」

「でもあなたのスーツケースをこじ開けて預金証書を盗んだわね」

五妹は憤慨して答えた。「阿娘、なんでわざわざあら捜しするんですかい。ほかの人だったら少しでもいいことを言っけとりなすでしょうが」

「でもあなたのご亭主はあなたのお金を盗んだんじゃないの？ それであなたが戻ったのを見て、びっくりして生霊を見たみたいになったんでしょ」私は容赦せずに言った。

「寒くなってきたから、服を探さなきゃならなかったんですよ」

「ご亭主の服はあなたのスーツケースに入れてあるんだったら、なんで鍵を渡しておかなかったの？」

「あの人の服があたしのスーツケースに入れてあるわけはありませんよ。あたしのスーツケースにはあの人のものは入ってないですよ」と言い終わるや慌てて話をそらし「あたしの亭主はとても正直もんなんですよ。預金証書は何枚あるかって聞くん、あたしが知ってるわけじゃないでしょうが、それで適当に答えたんです。七枚あるって。そしたらなんと、あの人は両手を後ろにやって、あたしの目の前に差し出したのがちょうど七枚だったんですよ！」

「偽物でしょ」

「偽物のはずがないですよ。手を後ろにやって取り出してきたんですよ。あたしの目の前に立ってね。あたしが口にしたとたんすぐに取り出したんですよ。多くもなく少なくもなく、どんぴしゃり、ちょうど七枚をね」

五妹は当時の情景を思い出して思わず笑いだしながら言った。「あたしの亭主は本当に意地悪くてね、あたしにテストするんですよ、全部でいくらあるかってね。あたしが知ってるわけじゃないでしょう」

私是因为息をついて言った。「ねえ五妹、あなたってどうしようもなく愚かよ」でも本当は愚かではないのだろう。胸のうちにいつもつかえているものがあり、私がそれをほどこいてやるか取り去ってやるのを待っているのである。私は彼女に尋ねた。「あなたのお金はみんなご亭主に渡しちゃったの？」

「あの人があたしに要求したことなど断じてありませんよ。ただね『あんたのエプロンに隠しときなよ』って言うだけで。からかってるんで、あたしのエプロンから持ち出したことなんて一度もないんですよ」

五妹は自分がものを失くしやすいのをわかっていて、金はすべてご亭主に渡して保管してもらっている。彼女は幾重にも重ねたエプロンをつけていた。一番内側は我が家の青いエプロンで、その上に一枚一枚と重ねており、外側の一枚は黒だった。内側の布一枚ずつにポケットがひとつついていた。そのうちの一枚は贈り物の茶葉の包みの白い布

で、そこに記された住所と「錢鍾書先生」の宛名が洗い落とされずに残っていた。「ねえ五妹、あなたが迷子になったとしても誰かが拾って家まで送り届けてくれるわね」と私は笑ったものである。

ある時、彼女は我が家に着くなり再び闘牛のように飛び出していった。いつもよりもさらに猛々しい。「エプロンをバスに置いてきた!」という悲鳴だけが聞こえた。

「バスはもうとっくに行ってしまったんだから、探しようがないでしょうに」と私は思った。

ほどなくして五妹は、喜び勇んで戻ってきた。手には例の重ねエプロンをつかんでいる。エプロンは誰かが窓から放り投げ、停車場の道路わきに引っかかっていたのである。こんな薄汚れたぼろ布のかたまりなど誰が欲しがらうか。五妹はさつそく拾い上げて、ごそごそとさぐり、そしてお金を取り出して数えた。相当の金額であった。

五妹はものをよく失くすのだが、しばしば拾い物もした。ある時、ため息をつきながら「あんた様の家のものはきれいに洗って干しとくの、自分とこのものは汚くてひどいまま、閑がないねえ」というので、私は特別に半日の暇を出して——つまり有給の半日休暇という意味だが、衣類の整理をしに家に帰ってもらった。翌日、服は洗濯して干した? と尋ねると、「やれやれ、家にはほんとに遅くなったたどり着いたんですよ」と答えが返ってきた。実は、バスの中で腕時計を拾い、貴重な時計だから落とし主は慌てているにちがいない、とバス停ですつと待っていたのだという。

「車掌に預ければそれで済んだのに。落とし主は自分でも気づいていないかもしれないでしょ。その人をどうやって見つけるつもりだったの?」私は言った。

「あたしは無理にでも待ったんですよ。〔無理にでも〕⁽²⁾とは五妹のどこぞの方言でもない常套句で、彼女の頑固さ

を示す言葉である)、本当に待ち続けたんですよ。それで持ち主の喜んだこと。ずっとお礼を言い続けて、お金もくれようとしたんです。道行く人もこのおばあさんは表彰されるべきだと言っていましたよ」と彼女は答えた。

五妹は「労働模範」を「表彰」と同じく取るに足らないものとしていた。「表彰だって? もっと価値があるものを拾ったって表彰なんてごめんだよ!」。そして言った。ある晩、(当時彼女は解放軍幹部の家で子供の面倒を見ていた)子供を抱いて映画を見に行き、映画が終わったあとで子供の靴が片方失くなっているのに気がついたという。会場いたるところを捜しても靴は見つからなかったが、代わりに中身のぎっしり詰まった大きな財布を拾ったのである。中には布券、穀物券⁽²⁴⁾、たくさんの人民元紙幣、そして外貨兌換券、それから預金証書が入っていた。のちに持ち主から感謝された時、五妹は言ったものである。「感謝されてそれがどうだったのかい。別に表彰されることでもないさね!」

私と鍾書はひそかにこう結論を下した。一人の人間の倫理的な資質というものは認知能力とは正比例しない。五妹は識字、計算能力には問題はないが、ロジックはかなり特殊で、つまり認知能力に問題があるのではないかと。

五妹は得意げに「あたしの亭主がさ、金を稼いだんだ」と私に言った。

その亭主は毎月受け取る年金は百元にも満たなかったが、自分の名義で毎月百元を貯金していた。五妹の給料は夫の二、三倍あり、日常必需品はすべて五妹が負担していた。彼女自身は緊縮財政で、アイスキャンディー一つもったいないと買わなかったが、彼女の亭主には惜しみなく使った。「あたしの亭主は『プチブル』に変わっちゃってますよ、朝食にはどうしても威福餅^{ワフフル}じゃないとだめだ……阿娘、これぐらいの箱のを一回できれいに平らげちゃうんですよ。たくさんのバナナも、二、三回で食べきっちゃうし、水がわりにジュースやビールを飲むし」。五妹はよく夫のため

に大ぶりの角煮をたくさん作った。「どうして北方の人間はいつも大口で呑み込むかねえ。それこそ大きな塊を、かみちぎりもせず、よくかみもしないで、一口で呑み込みじまう。包子ひとつを丸呑みして、二口目をかむことすらしないんだよ」。五妹は亭主が食べるのをただ見ていた。「あたしも食べるさ」とは言うものの、明らかに見るだけで食べてはいない。形だけお相伴に口にするだけだった。

五妹は私の言うことを聞き入れて、貯金も彼女の名前を使うべきだと亭主に主張した。すると意外にもすんなりと承諾された。満期となった千元の預金証書一枚の名義を五妹に替え、五妹は満足していた。ところが、ちょうど預金したところで亭主の娘の小青が借り出してしまった。小青は抜け目がないんだ、と五妹は日頃から言っていた。小青は今月は二百元、数か月して百元、そしてもう一度百元を返したところで返却するのをやめてしまったのだった。

「しかたがないってこったね。小青がさ『以前は千元はこれこれの価値があつたけど、今はこれこれの価値しかない』って言うから」とため息をつくのだった。

ここまできて五妹は真相を洗いざらい話さざるを得なくなった。当初五妹は息子の阿田に金を送った時、家を建てた時の一千元はあたしの亭主が出したのだと言っていたのだった。阿田は結婚して子供もできて二年たった時、ふと思ひ立って五妹の亭主へ感謝の手紙を書いた。「あたしの亭主はね、もう喜んじまってさあ、有頂天になって。手紙を息子や娘たちに見せたんだよ」

亭主の息子は「下放」⁽²⁶⁾させられ、その地で結婚して今でもそこに住んでいたが、しょっちゅう出張で北京に戻ってきていた。小青は何かの店の「経営者」になっていた。亭主は常日頃「何はともあれ我が史家一族からとうとう一人の『史青』が出るようになった」⁽²⁶⁾と得意満面で吹聴してまわった。小青の夫は労働者で、仕事の合間に道端で通行人

に偽ブランドの時計を売り、かなり荒稼ぎをしていた。この彼ら兄妹が阿田の感謝の手紙を見て「おっとさんは人家を建ててやる金を持っているんだ」と大騒ぎをやらかしたのだった。

「事情をちゃんと説明すべきじゃない？」私は言った。

五妹は、ことははっきりし過ぎるくらいははっきりしているのに、まだ説明することがあるのか、と言う。「あたしがあたしの亭主に嫁いだ時は、ひどい貧乏でさ、ベッドが一つしかなくて、小青はそこに父親と一緒に寝てて、ぼろの掛け布団一枚しかなくてさ。結婚する時には他から一枚掛け布団を借りて来たんですよ。家の中は何にもなしのがいんど、あの人の職場が出した『福利金』借用証書の厚い束だけ。十センチほどの厚さになってさ。あの人の前の一人（先妻をさす）は病気で一日中ベッドに寝てて、新蒜苗【ニンニクの芽】が市場に出たら買って食べちゃうんで、そのあとの二十日余りは金を借りて窩窩頭^{ゴゴトウ}しか食べられなかったのに。あの人にそんな金があるわけないでしょ。あたしが貯めた金も、あたしの娘が持つてる金もみんなそこに入ってるのにさ！」

私はため息をついた。「あなたのご亭主はほんとに面子^{メンツ}だけ気にする恥知らずね。その息子と娘は愚か者じゃなければやくざ者じゃない？」

「あいつらのことなんぞ誰が知るもんかい」

「それならご亭主の目の前で事情をはっきりと説明したらどう？」

「そんなこと言ったらあの人、怒りますよ。怒って病気になったらどうするんですか。阿田の手紙が得意で得意でたまらなかったんですよ。あの得意顔を見せたかったもんですよ」

私はこの件を鍾書と阿圓に話した。二人とも大いに憤慨した。五妹はいぶかって言ったのだ。「なんでそんなに怒

りなさるのさ。あたしだって怒ってないのにさ。あたしは怒らない性分でね、あんた様がたに話したのは不満を発散させただけです。あたしの亭主をちょっとへこませてやりたかっただけでさ」と言うのだった。

それでも五妹は彼女の亭主が多年にわたる出稼ぎを許してくれたことに感激していたし、いつもあたしの亭主はまっとうで正直だと言うのだった。もしかすると人間は大多数が彼女の亭主のように、自分をまっとうで正直だと思っているのかもしれない。五妹がよく耳にしていたのは、自分の亭主の自己評価だった。それで五妹は亭主はまっとうなものなら、五妹はすぐに「あたしの亭主こそそれだよ。あたしの亭主は錢先生みたいにずぼらじゃなくて、襟にはいつも真っ白な襟当てをして、両肩に肩パットもして、いいもの食べて色白で肉付きがいいんですよ」と返してやるのだった。

「誰のおかげでそんなに色白で肉付き良くなったのかわかっているの？」

「あの人はね、前世で柱みたい以太いお香を献上したってよく言ってますから」

五妹はわざわざ彼女の亭主の写真を持ってきて私に見せた。ぼんやり写ったその顔を目にしたとき、「色白で肉付きがいい」が頭に浮かび急いで写真を返した。蛆に手が触れたような感じがしたのだ。阿圓が帰宅したときにこの話を聞かされると、阿圓は笑った。「お母さん、わかってないねえ、五妹にとって亭主は『白馬の王子様』なんだってば！」わたしは心を落ち着けて考えてみた。彼女の亭主が「白馬の王子様」に値しないと云えるだろうか。スーツケースをこじ開け、中の預金証書を取ったとき、突然五妹が現れたので真っ青になったというのはまだ良心がある証拠だろう。顔も赤くならず心臓が胸打たない者だっているのだ。五妹は些事にこだわらず、お金をこの人物に預けて保管し

てもらおうというのは、預金証書が夫婦共有のものということだ。しかも夫は毎月貯金をしているのだ。人生のほとんどを負債の中で過ごしてきたのだから、大金をくれたことに感謝する手紙を受け取ったなら狂喜乱舞してもおかしくはない。半生を飢えの中で過ごしてきたのだから、大きな塊肉の煮つけを前に、がつがつしないでいられようか。生まれて初めて旨いものがありついて、良い妻にめぐりあつたと喜んで「前世で特大の（柱ほどの）香を献上した」と言うのは、まだ感謝ということを知っているのだ。毎日五妹の帰宅を待つて、彼女を「からかい」彼女に「悪さをする」のはやはり惚れているからではないか。「白馬の王子様」だつてもう宮殿や英雄美女の世界から出て一般人の世界に足を踏み入れるべきだろう。

彼女の亭主には職業病があつた。下肢に静脈瘤があり、脚の自由がきかなかつたのだ。外出するときは車いすに乗り、五妹が浴場まで押して行つて足のあんまや爪の手入れしてもらつていた。「あたしは全身大汗かいて、風の中で外で立つて吹きっ晒しになつてせき込んでもあるのに、亭主の方は中でぬくぬくしていつまでたつても出てきやしない。今わね、あたしが足の手入れをしてやつてゐるんですよ。これで節約もできるしね」と五妹は言う。それでもしょっちゅう申し訳なさそうに、またあたしの亭主の足の指を傷つけてしまったと言つた。時には静脈瘤のひどい脚に包帯を強く巻きすぎて、「それであたしの亭主はね、一日中痛がつてたんですよ」とも言う。

「両手がだめになつたわけじゃないし、自分でほどけないの？」私は言つた。

「あの人は腰を曲げることもできないし、あたしの方に脚をのばすことしかできないんですよ」

私は聞きたくなかつたので、相手にしなかつた。

ある時、五妹は彼女の亭主を診察してもらいに病院に連れて行くので休みを取つた。五妹は病院を全く信じていな

い。曰く「こっちの窓口で順番待ちし、あっちの窓口でまた並んで、階段を上り、階段を下り、ずっとあちこち回されて、医者に会ったと思ったら、一言二言何言ったんだかわからないまま、高い薬を処方されて、また何度も何度も並んで、お金を払って、こんちくしょうめですよ、それでもって薬が効かないんだから！」五妹は痛むところがあると、「お嬢さん」か「阿娘」に「はだしの医者」がわりを頼む⁽²⁸⁾ので、私たちは常に常用の薬品を備えとして購入しておいた。けれども今回彼女の亭主の歯痛には間接的な私たちの医療行為は役に立たなかった。五妹が言うには、家の戸口前に、真っ白な入れ歯をゆらゆら振りながら入れ歯売りが来たのだと。その入れ歯が白くて歯並びよく整っているのを見て、五妹は亭主に嵌めさせることにした。入れ歯売りが亭主の歯の上に何かを塗っただけでこれこれの金を要求したので、彼女の亭主が怒り、居民委員会⁽²⁹⁾につきだそうとした。怒りのために亭主が体調を壊すことを恐れ、五妹はあわててなにがしかの金を入れ歯売りの手に押し込み、その場から逃がした。亭主の方はその夜歯が痛み出だし「死にそうだ、病院に行くー」と喚くことになった。

病院に着くと、——もちろん亭主は座ったままで、五妹が何度も並び、階段を上り、階段を下りした後、亭主を支えて医者に見せたのだが、医者は、歯の上にセメントが貼りついているので治療のしようがない、セメントを除去しないと治らないと言う。亭主の歯のセメントは何度も磨いてようやく取り除くことができた。そしてセメントが取り除かれると医者も必要なくなったのだった。

ある日、五妹が駆け付けてくると、顔が紫色に腫れて形の悪い茄子のようになっていた。五妹は怒りで歯まで痛むと言う。私と阿圓は「はだしの医者」としてその原因を仔細に聞き出した。つまりは、彼女の亭主の下放した息子が、娘のひとりを北京の学校に上げるので送ってよこし、学費生活費もろもろを彼女の亭主に負担させようとしたのだっ

た。五妹はさらにこの十四、五歳の娘から、亭主がしょっちゅう息子に金を送っていたことを聞き出した。その家には大きな戸棚、冷蔵庫、カラーテレビ等々すべて揃っていた。こちら側では、冷蔵庫も、カラーテレビ等なにもかもを五妹の娘が買ったのだ。五妹は憤慨して亭主と口論になったところ、「あたしの亭主はね、「ひとはみな私心【私利私惑】があるものだ」なんて言うんですよ」

亭主の私利私惑は自分の子供たちをかばうことにあり、五妹の私利私惑は亭主をかばうことにだけあった。五妹はひどく不公平だ、と怒りにかまけて叫んだ。「こんちくしょうめ、もうやめだ!」

私と鍾書、阿圓はみな五妹に同情し、異口同音に彼女の「やめだ」に賛同の意を表した。

五妹は力を込めて言い放った。「明日からやめます!」

我ら三人はあつげにとられ、互いに顔を見合った。五妹が亭主に対する恨みつらみを一気にこちらにぶちまけるとは、予想外の想定外だった。

それで私は彼女が以前話したことを思い出した。「あたしという人間はね、だれよりも良心がないんですよ。故郷の寧波ではですね、母乳で育った子供は白くてよく太ってて、身体も大きいんですよ。だのに故郷の家に戻って阿田を見たら、黒くて痩せてて小さくて。もうかつとなってしまうて、あの子を打ち据えたんですよ。ひどく殴ってね。あの子が泣けば泣くほどひどくね」

今回、彼女は亭主のために金を稼ぐのが嫌になると、私たち一家の方を放り出したのだ。五妹が来ないと言えば、それは文字通り来ないことを意味した。

私はため息をついて鍾書に言った。「人間があまりに愚鈍だと、善人にはなれないのね」「どうしてだい?」鍾書が

尋ねた。

「物事の是非も善し悪しも判断できない者が、善人になり得るの?」

「判断できる者なんているのかい?」

その通りだった。愚鈍か否か、私と五妹についても五十歩百歩の差に過ぎない。やることが的はずれだとしても、それは悪事をなすことと同じではない。私自身こういったことの「善し悪し」については判断できない。それなのに五妹を「一刀両断」しようとしたのである。

これは一九八七年のことで、五妹はすでに三年ほど我が家で働いてくれており、私たちは怠けることに慣れてしまっていた。それでも五妹に頼らずとも何とかやりくりすることができた。私は全自動の洗濯機を購入し、洗濯物を請け負った。阿圓は買い物と料理担当。彼女は家にいることがあれば喜んで料理をしていたし、五妹も助手をつとめるだけだったのだ。私は粥とご飯を炊く係となり、階段を上り下りして新聞や手紙を運ぶのはそもそも鍾書の仕事だった。鍾書の耳は、警察犬の鼻のごとく、郵便配達人が遠くから声をかけてもわかった。動きも早く私はいつも先を越されたものである。私と鍾書と一緒に野菜市場に買い物に行くこともあったし、食器洗いは阿圓の仕事だった。いずれにしろ私たちはいっせいに手足を動かし協力したので、日々の生活は大変愉快だった。五妹がいけないことで却って煩雑さがなくなりさえた。

例えば、五妹がテレビで連続ドラマを見ると、いつも微に入り細に入り物語を私に語った。銭先生の『圀城』⁽⁹⁾を見た時も、鍾書にまわりついて「ミス鮑^{ベア}がミス蘇^{スウ}のハンカチを海に投げ込んだ」等々いつまでも話をやめなかった。『唐明皇』⁽¹⁰⁾を見れば私に歴史談義をひとくさり聞かせる。

「もうたくさん、五妹、こう言ったことは知ってるから」と言おうものなら、「あんた様をご覧になったのは本の中のこと。あたしが見たのは実物ですよ」と言つて、是が非でも語ろうとする。

五妹の家は下町の路地の片隅にあり、交通の便が非常に悪かった。彼女はいくつか文字を知つてはいたものの、やはり文盲である。バスが路線変更になつても、頑固にこれまでの道を歩こうとした。自宅から出る際はぐずぐずして毎日のように遅刻した。夜は夜であたりが暗くなつて安全ではなくなるし、亭主が帰りを待ち望んでいるのではないかと心配するので、早く帰るようにと促した。夕食後に阿圓が鍋や食器を洗い、鍾書が碗や皿を台所に戻し、私がテーブルを拭いて片付けると、五妹はわざわざボロ雑巾を見つけて繕うとする。「帰るなんて容易さ、立ち上がつて出るだけでしょ。でもあんた様方があたしを雇つたのは何のためですかい？ みんな忙しくしてんのにあたしが帰るんですか？」またこうも言った。「早めに出たつてバスを待つのは同じでしょうが」。ともかくにもなんとか納得させてからも、玄関口で「腕時計はつけた？ 定期は持った？ 忘れ物はない？」といろいろ確認しなければならなかった。身体の前に一つ後ろに一つと袋を担ぎ、手にも手提げをもつて、ようやく戸口を出る。ところがドアの鍵をかけたと思つたところで、何か忘れ物をしてまた戻ってくる。毎日がこんな感じであつた。朝来れば「あたしの亭主が心配してそりやもう大変でしたよ。あたしを迎えに来たのが行き違いになつちまつたんですよ」と言うのが常だつた。

五妹の強情っぷりも大したものだつた。モップでは二度、三度と繰り返し床を磨くのに、どうしても箒を使おうとしなかった。私がおみを掃き出そうものなら、卵から棘を拾い出そうと言わんばかりだつた。テレビでドラマを見過ぎて視界がぼやけ、床はきれいだと勘違いしたのである。私が自分で掃いても不機嫌になつた。鍾書は、五妹をとにかく怒らせちゃいかんよ、卵が岩にぶち当たるようなものだから、と言つた。私はしかたなく五妹を（忍耐力

を養わせる」「教練」とみなすしかなかった。

ほぼ半年ほどすると五妹はまた戻ってきて尋ねた。「誰か人を探しますか。まだ見つからないんですか。あたしが戻ってきましたけど、どうですか」。

故郷の家に戻っていたという。本当かもしれない。私たちもそろそろ家事が面倒になってきたので、彼女が戻ってきたのはちよつどよかった。

どうやら五妹の亭主に対しては依然として「やめだ」状態で、亭主のための金稼ぎには積極的ではなく、家政婦担当は我が家だけになっていた。いつそうしたのかわからぬが、自分の母親の写真をはめ込んだ鏡も我が家の台所にかけていた。

「家の守り神」もこつちにもってきちゃってるよ」と鍾書がこつそりと言った。

写真を覆っている透明の紙をめくって彼女の母親の写真を見せてもらった。それは一人の痩せた老女だった。五妹は私に言った。「お嬢さんが本当に羨ましいですよ。毎日のように母親と一緒にいられる。あたしは昼間はここにいて、夜はおつかさんのいるあつちに行くんです、毎晩のように夢でおつかさんと一緒になるんですよ。おつかさんは本当に哀れですよ、兄さんも死んでしまって、それで泣いて泣いて、目までだめにしてしまって。豚小屋の脇の小屋に一人ぼっちで住んでいて、豚の餌で食いつないで。纏足の脚なのに毎日山に登って柴刈りですよ」

「彼女は烈士の母親じゃないの」私は言った。

「何の役にも立ちやしない。すべて親族の若い嫁に握られちゃってさ」。農村地域では女性が少ない。その遠縁の嫁は少しでも気に入らないことがあれば出て行ってしまう。「しかたがないってこつたねえ」、五妹はため息交じりに

言った。確かにどうしようもなかった。実の娘は一緒に住むことができず、手紙を書いても金を送ってもどうにもならなかった。その後彼女の母親は飢えと寒さで亡くなり、死んでから数日後に発見されたのだった。

戻ってきてから数年と経たずして五妹は再び亭主に怒りを爆発させた。今回の衝突は一層激しいものだった。小青がコネをまわし亭主の息子、その嫁、孫と一家全員の戸籍を北京に移し、息子夫婦の仕事先も見つけてやった。小青は前々から五妹の亭主に、「祝いの品は現ナマだよ」と祝い金を送るよう催促していた。小青は神通力でも使ったのか、外地の息子一家ははどなくして北京にきて五妹の亭主と同居することになった。

亭主は息子の嫁に会うために、急ぎラシヤの外套を作って見栄えを良くしようとした。皆がラシヤの外套を着てるというのに自分だけが生涯着たことがない、無駄に人生を過ごした、と言う。亭主とその娘は、祖父から孫三代にわたる団らんをバタバタ、和気あいあいと準備していた。五妹は、自分がこの団らんの部外者であるだけでなく、邪魔者になっていることに気がついた。

彼女の家は二間しかない。五妹と亭主は最大でも一間しか提供することしかできない。小青は五妹が集めてため込んだ「宝物」をごみとして捨てていく。「彼ら」が有用だとみなすもの、例えば白砂糖、石鹼、油等々はみな「彼ら」のために取っておかれた。

ついに「彼ら」がそろって北京にやってくると、亭主はラシヤの上着を着こみ、祖父から孫三代にわたる団らんと相成った。だがことは常に望み通りにはいかないものである。地方出の息子の嫁は「北京ルール」をわきまえず、「お父さん」と声をかけるところか義父を全く無視して挨拶すらしなかった。息子も孫も、この嫁に倣って顔を合わせても挨拶すらしなかった。ともかくこの嫁は義父を見下していたのだった。

亭主が働いていた料理店は、夜勤なのに居眠りばかりしている、と亭主をお払い箱にしてしまった。つまり食事もなくなったということである。五妹はため息をついて言った。「あたしの亭主はほんとに真っ正直な人間でね、誰もが怖がつてたんですよ。夜勤についてるときは誰も物を盗めなかったのにさ、食べさせるのが嫌だって。食事つたつて、あの人はちよつとばかり、一椀、二椀の肉を余計にもらおうとしただけなのに、料理運びのあの小童めが、椀に塩を入れてさ、しょっぱいこと、水をいくら飲んだつて喉が渴いて仕方なくなつて、あたしの亭主もそれで二度と肉を欲しがらなかつたつていうのに」

「彼ら」一家はまるで実家に住んでいるように、食事は五妹の亭主の供給、つまり五妹が供給した。今後これが長期にわたるならば策ではない。五妹は炊事場を分けることを言い出した。一家の長は亭主だった。「父子がどうして台所を分けることができるんだ。それに俺は今後息子に養ってもらうんじゃないか」と主張した。言い争いの結果、五妹が自分のコンロ、かまど、鍋、椀などの諸々を「彼ら」に使わせることになった。彼女の亭主は自分の食事をそっくり息子の嫁に作ってもらい、毎月食費を渡すことにした。五妹は金を余計に使いたくなかつた、ということである分はなく、料理をする場所もなくなり、仕方なく、三食を我が家に頼るしかなかった。

彼女の亭主は当初食事の際に息子の部屋に入れてもらったが、すると嫁は肉や香腸【中国式甘いソーセージ】、卵などを息子や娘の椀の底に入れ、食卓には菜葉の茎やキュウリ、大根の千切り等しか置かなかつた。しばらくすると部屋に入れなくなり、座る場所がないからと一人で摂るよう食事を亭主の部屋に運んだ。朝食はマントウ一つか烙餅【水でこねた小麦粉を丸く伸ばして鍋で焼いたもの】一切れ、昼食はぼそぼそした硬い麵。包子か餃子の中身はジャガイモである。五妹が見つけたのだが、「彼ら」が食べる方は肉入りだつた。亭主は嫌だとは言えず、噛み切れな

いからと全部五妹にやるのだった。いずれにしろ亭主の朝食はウエハースだったが、肉の塊はなくなってしまった。私が見たところ、五妹には彼女なりの原則があり、我が家のガスを使つて亭主のために肉の煮込みを作ることはしなかった。

「毎日亭主の残り物を食べて、その上お金を出して美味しいものを買ってあげてるの？」私が五妹に尋ねると、五妹は「今はあの人があたしに金をくれるんで、あたしは一銭も使ってないんですよ」とそつと私に耳打ちした。彼女の亭主は五妹には毎月五元を渡したが、後で少し減らした。ともかく五妹は渡された金をすべて亭主のために使っていた。その他の退職金はそっくり息子に渡し、自分は貯金の利子を使っていた。ある時期は利子はかなり高かったので亭主は「大金持ち」でいられた。茶葉は百グラム数百元のを飲み、さらに松の実を好むようになり、古くなつて油の回つたものは安いので、一度に二キロ分を買い、大口を開けて好きなだけ食べた。「食べないのは金の無駄づかいだ、一生無駄に生きちまうのはごめんだ」というわけだった。例の数枚の預金証書は「ほらおまえも俺も見ただろ、お前も俺も数えるから、かどがすりきれちまつてる」で、彼らが言うには「あと八千元あまりある」ということだった。しかし、そこに自分の分などないことを五妹はとくに見抜いていた。

五妹は再び自分で貯金をはじめ、預金証書は隠しておいた。「彼ら」はソファアの敷物の中身までばらして、あちこち部屋中もひっくりかえし彼女の金を見つけ出そうとしたという。

五妹は得意げに「あたしの隠し場所は誰にもわからないのさ」というのだった。

私と阿圓は五妹は屋根裏か壁の中に隠したのだと推測して、「家屋は強風で拭き倒されたり、火事になったりすることがあるわよ」と忠告した。さらに私は「隠し場所はもう一人知っているべき」とも言った。

五妹は「あたしの亭主もそう言ったんですよ。でもね、おっかさんが言ってたんだけど、金を隠すときは、右手でしたことを左手にも知らせないようにするようになって」もちろん五妹は我が家にそれを隠すことはしなかったし、預金証書の番号をメモするからと私が行っても受け入れなかった。メモしたら天下に公表するようなものなのだ。

後に彼女の預金が満期になったとき、ちょうど長男が北京に彼女を尋ねてきた。五妹はもう以前のように何事も亭主に従うことはせず、亭主には告げずに娘の家に集まり、数枚の預金証書を現金に換え、自分の子供たちに渡した。阿田には、五妹から手荒に扱われたことがあったので、それなりの金額を与えたのだった。

五妹は意外にも私には満期になる前に機密を漏らしていた。「預金証書は平べったい鉄の小箱に入れて屋根の梁の下に押し込んであるんですよ。誰も手が届かないし、誰も梁を動かさせやしない」。亭主を公衆便所に行かせ、その隙にテーブルの上で立てばその鉄の小箱を取り出すことができたのだった。

五妹の子供たちはいずれも金銭に困っていなかった。二人の息子はすでに民工【日雇い労働者】から請負仕事の棟梁になっていた。娘も裕福で、三人とも母親を家に引き取ろうとし、彼女の亭主すら迎え入れようとしていた。五妹は「何がどうあっても」養われるのは嫌だと言った。それは「ただ飯喰らいの稼ぎなし」なのだ。自分の食い扶持ぐらい自分で稼げ、なのだった。ただ亭主が病に倒れて自分が仕事ができなくなることだけは心配していた。私はある時、五妹が電話口で子供たちに「あの人がこわいんじゃないかって、あの人が病気になるのがこわいんだよ」と言うのを耳にしている。

五妹はもう子供たちのために稼ぐ必要がなくなつたので、亭主の好物をたくさん買って、亭主と一緒に楽しみたいと考えた。ところが亭主は旨いものを見るとたちまち「彼ら」のことが頭に浮かび、のどに通らなくなり、五妹がい

なくなるや否や五妹のものを「あちら」に持っていつてしまふ。五妹は忘れっぽいたちだったので、出かけるときにはいつも一度は戻ってくるのだが、それで亭主が彼女のを息子や孫たちの方へやってしまっているのに気がついたのだ。そして怒りのあまり「こんちくしょうめ、いつも裏でこそそそ持っていく。あたしの目の前でやるのならまだ許せるのに」と罵るのである。

私が「ねえ五妹、あなたにとって一番楽しいことはあなたのご亭主とベッドに腰かけて、ものを食べたり、トランプをしたり、テレビを見たりすることでしょう？」と尋ねると、五妹は「その通りですよ」と答えた。

それで私が「ご亭主にとって一番楽しいことは、あなたのものを息子や孫に食べさせることよね」と言うと、五妹はため息をついて頷いた。「しかたがないこったねえ」

私は「あなたの我利我利亡者の亭主」と言ってからひとことこう付け加えた。「心配しないでいいわ、あなたのご亭主は罵つても死なないから、罵るほどに長生きするわよ、我利我利亡者だから」

五妹は私が亭主に長生きを祈つてやり、同時に彼女のガス抜きもしてやったので、大喜びで満面の笑いを浮かべた。口をあんぐりと開け、言われた一連の言葉をすべて飲み込もうとするかのようなうだつた。そして「あたしの亭主はね、その上恨み言を言うんですよ。妻をもらつたってなんにも得することがない、家のことはほつたらかし、日がな一日外にいるって。あたしに「彼ら」の食事を作らせたいんですよ」と恨み言を言った。

最大の心配が往々にして本当になるとはよく言ったもの。五妹は彼女の亭主が脳卒中を起こすことをひたすら恐れていたのだが、亭主は脳卒中を起こしてしまった。なんとか息子と娘が手続きを手伝い入院させることができた。医療費は公費で賄われるのである。

電話で私は五妹に尋ねた。「付き添いで泊まりはどこに寝るの？ 病人のベッドの下とかに寝ているの？」病院によつては確かにそういう状況だと聞いていたのである。

「阿娘、あたしは生涯こんな金持ち扱いを受けたことなんてないですよ。向き合つてのベッド、二つのベッド、間に小さな戸棚もあるんですよ」

五妹の家の大きな木製ベッドは私があげたものである。老人が夜勤をするので、二人は代わりばんこに寝ており、ベッドの片側半分は物が山積みになっていた。亭主が夜勤をやめると五妹のベッドを独占してしまい、彼女は半身がソファ、半身が椅子の状態で寝ていた。ソファの片側の半分も物で占められていたからである。

「あなたが寝て病床が汚れても大丈夫なの？」

「あたしの亭主が寝ているほうが汚いですよ。病人が一人退院したところなので、そこに寝かされたんです」

「あなたが寝るほうのベッドは料金を支払うの？」

「払いますよ。小青が言うには、支払う金が高いほど割がいいのだと」

彼女の亭主は脳卒中を起こして半身不随になると、ほぼ完全に五妹一人の手に任されることになった。子供たちも時には動き、手助けをすることもあったが、やはり当事者ではない。

五妹の心配は見事に当たった。老人が病気になるると完全に彼女の負担となり、彼女自身も仕事ができなくなってしまったのである。

ただ亭主の病はそれほど重くはなく、状況が少し良くなると家に追い返された。八千元はすでにきれいに使い切り、息子の嫁たちも食事をかまわなくなった。やむなく五妹は台所の半分の使用権を得て、亭主の年金で二人は生活する

ことになった。

「お金は十分なの？」 私は尋ねた。

「十分ですよ！ 一か月に三、四百元もあるんですよ、十分です」

「彼らに食事を作るの？」

「一食だって作りませんよ」

私は彼女を慰めて言った。「老いた二人が一緒に過ごすことを願ってたじゃない。願いが叶って幸せになったじゃない」

「まあ幸せってことですな、しかたがないってこったね」 彼女は答えるのだった。

一九九七年五月十九日

注

- (1) 仮名。「楊絳生平与創作大事記」「楊絳全集」(人民文学出版社、二〇〇四年)によると実在の人物であるが実名ではなく呼び名を変えている、とある。呉学昭著『聽楊絳談往事』(生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇八年、改訂版二〇一七年、三八三頁)によると、「包三妹」が実名である。
- (2) 原文タイトルは「方五妹和她的『我老頭子』」。初出は《十月》(一九九七年第三期)、本翻訳はこれを底本とする。雑誌掲載のテキストには本文末尾に「陈东捷责任编辑」との記載があるが、これは雑誌編集上の責任者表示であり作品本文の構成要素ではないと思われるため本訳では省略した。それ以外は、のち『楊絳文集3 散文卷下』(人民文学出版社、二〇〇四)等の収録テキストとの異同は確認されない。尚、『老頭子』とは「じいさん」の意。中高年の夫婦で夫を指しても用いられる。
- (3) 著名な作家、評論家の柯靈(一九〇九—二〇〇〇)のアンソロジー。「現代作家選集叢書」の一巻として香港三聯書店、

北京人民文学出版社より一九九〇年刊行。

- (4) 題名は「読『柯靈選集』」(一九八四年七月作)。「雜憶與雜写」(北京・生活・讀書・新知三聯書店、一九九四年)収録。のち『楊絳文集』(人民文学出版社、二〇〇四年)、『楊絳全集』(人民文学出版社、二〇一四年)収録。

- (5) 原文は「描摹景物、点染得宜…抒写情感、熨帖入微…叙述故事、生動伝神」。

- (6) 原題「林奶奶」初出は隔月刊『隨筆』一九八五年第二期。同名で、中島みどり訳『お茶をどうぞ』(平凡社、一九九八年)収録。櫻庭ゆみ子訳「林ばあさん」(藤井省三編『笑いの共和国・中国ユーモア文学傑作選』(白水社、一九九二)収録。

- (7) 原題「順姐的、自由恋愛」一九九一年一月執筆、(注4)前掲書『雜憶與雜写』収録。邦訳「順姐の『自由恋愛』」は(注6)前掲書『お茶をどうぞ』収録。

- (8) 原題「她的自述」「走到人生边上——自問自答」(商務院書館、二〇〇八年)収録。邦訳「彼女の語り」「楊絳の『彼女の語り』」として『慶應義塾大学日吉紀要・人文科学』(第四〇号、二〇二五年、二八〇頁—三三三頁)掲載。錢鍾書の看病人として雇われた女性の一人語りを聞き書きしたという形をとり、スタイルと試みが他の三篇とは異なっている。詳細は作品翻訳の解題を参照。

- (9) (注1)前掲の「楊絳生平与創作大事記」によると、錢瑗が亡くなったのが一九九七年三月四日、茶毘に付されたのが同月八日、本作の最後にある日付は同年五月十九日。(注1)前掲書「聽楊絳談往事」同頁、では「阿圓【娘の呼び名】が亡くなった後、楊絳は娘を想い、圓圓【娘の呼び名】の六十歳の誕生日に、圓圓を崇拜していた包三妹を方五妹と仮名にして書いた」とある。しかし一日で書き上げたのは無理があると思われるので、娘の死から間もなく書き始めたものと考えられる。

- (10) 前掲(注9)参照。

- (11) 参照「我們仨」「私達三人」(邦題「別れの儀式」楊絳と錢鍾書…ある中国人知識人一家の物語)櫻庭ゆみ子訳(勉誠出版、二〇一一)。

- (12) 前者は「菲爾丁関与小説的理論与实践」「フィールディングの小説に関する理論与实践」季刊『文学評論』(一九五七年第二期)、のち大幅に修正し「菲爾丁的小説理論」として楊絳論文集『春泥集』(上海文芸出版社、一九七九年)収録。後者は「旧書新解 有什麼好?」読奥斯丁的「傲慢與偏見」(「旧書新解 どこがいいのか——オースティン「高慢と偏見」を読む」『文学評論』(一九八三年第三期)のち楊絳論文集『関与小説』(北京・生活・讀書・新知三聯書店、一九八六)収録。後者については中島みどり氏の邦訳がある。参考『みずす』三五(2)三八三、みずす書房、一九九三。

(13) 楊絳はコンピュータを使わず、最後まで手書きで原稿に書いた。『我們仨』の翻訳作業において、筆者からのメールによる質問には、世話人(呉学昭氏)を通じて返事をいただいた。

(14) 『にんじん』の作家ジュール・ルナール(一八六四—一九一〇)の『日記』にある言葉という。なお『日記』を含めルナールの作品を錢鍾書は当然読んでいるが(参考『錢鍾書手稿集 外文筆記 総索引』商務院書館、二〇一五)、フランス語に堪能な楊絳もルナールの作品は読んでいたと思われる。

(15) 原文は、納靴底。布靴の底をしつかりさせるために糸で幾重も縫い込むこと。農村での女性の仕事の一つだった。

(16) 一九六七年に毛沢東が始めたスローガン。自己批判を通じて私心を除き、修正主義を批判して無産階級のイデオロギーを守るというもの。拡大解釈されて政治闘争の武器となり、人々の日常を縛っていくようになる。

(17) 楊絳の夫、錢鍾書(チエン・ジョンシユウ 一九一〇—一九九八)。

(18) 楊絳の娘、錢瑗(チエン・ユエン 一九三七—一九九七)。

(19) 母親に対する呼称。方言、口語。「お母さん」、「母さん」、「おっかさん」等々。

(20) 原文は「童養媳婦」。婚家の息子が成長して結婚生活ができるまで娘が子守兼家事労働力として婚家で働く、主に農村で行われた風習。

(21) 原文は「没辦法喂。」。喂は感嘆詞。文字通りの意味「方法がない」から「どうしようもない」「仕方がない」と訳される。

(22) 等級が上位にあるかまたは12年以上軍役に服した軍人には退役後も職業が幹旋され厚遇される。

(23) 原文は、硬是。状況に構わず強引に進める姿勢を示す、「むりやりに」、「かたくなに」。

(24) 原文はそれぞれ、布票、糧票。一九五〇年代から八〇年代にかけて発行された生活必需品購入のための配給券。

(25) 原文は、上山下郷。「上山下郷運動」を指す。俗にいう「下放」。主に文化大革命時期に行われた大規模な労働人口流動政策。都市の青年や知識人を貧しい山村、農村地域での肉体労働に従事させた。一九八〇年代に基本的に終結したが、「下放」では戸籍の移動も伴ったため、下放地の住民と結婚した場合は都市には戻れず多くの悲劇を生んだ。

(26) 出典不明。

(27) トウモロコシやコーリヤンの粉を水で溶き三角帽子の形にして蒸した食品。貧しい地域の主食だった。

(28) 原文、做赤脚医生。「はだしの医者」をする。「赤脚医生」とは、文化大革命前後より一九八〇年代にかけて、農村部で農業に従事しつつ基本的な医療活動をした衛生要員。素人の手当てを「はだしの医者」にかけて言ったもの。

(29) 原文、居委会。すなわち居民委員会。都市における行政末端組織。町内会に似るが地区での権限ははるかに大きい。

(30) 錢鍾書が一九四〇年代国共内戦時期の上海で執筆した長編小説。一九八〇年、同じ題名でテレビドラマ化され、茶の間の人気を呼んだ。

(31) 一九九〇年放映のテレビドラマ。唐の玄宗皇帝の波乱に満ちた生涯を描き、本格的歴史ドラマとして人気となった。